

李白の樂府について

島田久美子

京都大學

唐の李白の詩のうち、かなりの數を占めるのは、いわゆる樂府體の詩であり、人びとによく知られ愛されているのも、實はこのジャンルに分類されている詩であるといえる。樂府というジャンルは漢代に庶民の歌として發生し、宮廷音樂としても採用されているけれども、内容からいうならば、おおむね庶民の感情をうつすためのものである。いま殘されている宋・郭茂倩の「樂府詩集」は、そのジャンルの詩を漢代の古辭から唐・五代人の擬作に至るまで、可能なかぎり採録したものととして貴重な資料である。

樂府は、近體詩のごとき規則正しい韻律にしばられるこ

李白の樂府について（島田）

となく、自由で平明でありながら、しかも長い傳統をもつ詩のジャンルである。その樂府を好んでつくつた李白は、唐代にうちたてられつつあり、且つ杜甫などが緻密に完成していつた近體詩という新しい形式に立ちむかうよりも、かなり古い形式の中で呼吸した人といえるであろう。その意味では、杜甫とくらべて保守的である。したがつて彼の詩は、傳統の上に何物かを加える、もしくは潜在的な意識を顯在化するといった面で活潑であつたとはいえても、純粹に能動的な創造や獨創を示したとはいえない。ただ、自由で平明な樂府體の詩は、詩を愛好する多くの人びとにとつて、とつつき易い。李白はそのとつつき易さを先ず據りどころとし得たのであろうか、やがてそれを自己のものとして獲得し、従來の樂府詩を出發點としつつ、盛唐詩人の花形選手として登場したのである。彼が盛唐詩の一チャンピオンたる所以は、その樂府詩における活躍を分析すれば、ほぼ明らかになるであらう。そのためにはいくらかの比較の媒介が必要であり、樂府詩の歴史についての知識も必要である。

この小論で目的とするのは、李白の樂府詩が内容の面で、從來のものに比して如何なる變貌をとげているか、あるいは又、それが中國詩の中でどんな位置や意味をもつものなのか、ということを探ることにある。もつともその個々の細部にまで深くたち入る作業は、のちに再びなさねばならぬ仕事であるが、とりあえずここに提出するのは、李白の樂府、ひいては李白詩全體の性格のアウトライン素描である。

李白詩と稱されるものは、^{註1} 繆本によれば九百九十七首、そのうち樂府としてまとめられているのは百四十七首。許本によれば、樂府は卷三から卷六まで百四十九首である。

この二本の差異は、更に別のジャンルである填詞、「憶秦娥」「菩薩蠻」の二首を樂府とするか否かにもとづくが、樂府詩集に採られているのは更に多く、李白集では歌吟・閑適・閨情などの分類に含まれる詩をも入れて、百六十一首とする。この數は、李白詩全體の約六分の一に當り、彼の樂府に對する關心の程を示すものとみてよいであらう。

青蓮、樂府に工なり、蓋し其の才思横溢、發抒する所無ければ、^{すなわ} 輒ち此れを借りて以て筆力を逞ましゅうす。故に、集中多きこと一百十五首に至る。(趙甌北詩話卷一)

という言葉は、數のちがいはあるとしても、李白の積極的な樂府へのかたむきを強調したものと考えられる。

李白は又、杜甫とちがつて近體詩をあまり作っていない。明の胡震亨の李詩通の^{註2} 分體によれば、五言古詩がもつとも多く、全詩の約半數、四百四十一首を占める。長短句形式も李白詩の特徴をなすものだが、九十八首、そのうち五十首が樂府に集まつている。これらもやはり、李白の詩作態度の一半を説明するであらう。梓の中の苦吟はごめんであり、あくまでも定型の外へはみ出そうとする方向を示す數とみてよいからである。長短句のごとき、感情の流れ、表現欲求の刹那の動きに拘束をもたない詩型は、詩のリズムや本來の凝縮性をうしなつてはならない點で、すぐれた詩精神に支えられねばならないとしても、よりくつろいだ姿勢での詩作を可能とする。彼があまり近體詩をつくらず

に、形式の比較的自由的な樂府・歌行體の詩をつくつたのは、彼の豪放な情感と、壯闊な内容とを表現するのにそれがふさわしかつたからだと王瑤^{註3}も説く。

ところで、最近公けにされた詹鐸の「李白詩論叢」^{註4}の中の「李白樂府探源」は、李白の樂府詩の源流をまとめた便利な表であるが、とりあげているのは王註李太白集に收められた百四十九首だけである。樂府詩集の分類によつて排列する以上、全體にわたつて整理することがのぞましかつたが、いまここで、李白が樂府詩集の分類によれば如何なる種類の曲辭に多く擬したかを數的に求めると以下のごとくである。

郊廟歌辭	漢郊祀歌	1	1	0.6
鼓吹曲辭	漢鑾歌	6	7	4.3
	齊鼓吹曲	1	7	
橫吹曲辭	漢橫吹曲	4	6	3.7
	梁鼓角橫吹曲	2	6	

李白の樂府について (島田)

相和歌辭	相和六引	1	1	
	相和曲	4	4	
	吟嘆曲	1	1	
	平調曲	5	27	
	清調曲	3	32	
	瑟調曲	6	20	
	楚調曲	7		
清商曲辭	吳聲歌曲	2		
	西曲歌	5	15	
	江南弄	4	18	
	上雲樂	3	11	
	梁雅歌	1		
舞曲歌辭	鼓歌	3	4	
	白紵舞辭	1	6	
琴曲歌辭		7	3.7	
雜曲歌辭		38		
近代曲辭		2		
雜歌謠辭		6		
新樂府辭 (樂府雜題)		7		
		17		
		9		
		11		
		45		
		9		
		28		
		5.6		
		10		
		5.9		
		6.8		

以上のように、樂府詩集に収録される李白の詩は、その卷一から卷九十二まで、全百卷のうち六十卷百二十題にわたり、郭茂倩の分類十二のうち、燕射歌辭を除いた十一の部に及んでいる。唐に入つてからの創題による「新樂府」^{註5}はすくなく、七題十七首しかない。もつとも多いのが、雜曲歌辭に屬する三十八題四十五首、これに近代曲辭をも加えると、^{註6}四十題五十六首、全體の約三十五パーセントを占める。次に多いのが相和歌辭の二十七題三十二首である。うち雜曲歌辭について、郭茂倩は次の如くにいう。

雜曲なる者は、歷代これ有り。或いは心志の存する所、或いは情思の感ずる所、或いは宴游懽樂の發する所、或いは憂愁憤怨の興る所、或いは離別悲傷の懷を^{おもひ}敘し、或いは征戰行役の苦を言う。或いは佛老に緣い、^{そそ}或いは夷虜より出づ。兼收備載、故に摠べて之れを雜曲と謂う。(樂府詩集卷六十一)

すなわち雑多な種々の來源をもつ歌曲の總稱である。また、相和歌辭については、左を引用する。

宋書樂志に曰う、相和は、漢の舊曲なり。絲竹更も^{こも}

相和し、節を執る者歌う。……

唐書樂志に曰う、平調・清調・瑟調・皆周の房中曲の遺聲、漢世之れを三調と謂う。……

晉書樂志に曰う、凡そ樂章古辭の存する者は、並びに漢世街陌の謳謠なり。江南蓮を採る可し、烏生十五子、白頭の吟の屬、其の後漸やく弦管に被す、^あ即ち相和諸曲是れなり。(樂府詩集卷二十六)

と。つまり管樂と絃樂を伴奏とし、漢代以來のもつともポピュラーな歌謠の總稱である。雜曲歌辭の内容の多彩さ、並びに相和歌辭についての晉書樂志の記載は、この兩者の性格を説明すると考えてよいであらう。更にまた、相和歌辭についての王瑤の言は、これを補うであらう。即ち、

相和歌辭は樂府詩中の精華であつて、内容の社會性と敘事性は非常に強い。我々が普通に説く樂府詩の特色とは、實のところ主にこれらの篇章を指しているのである。(中國詩歌發展講話)

從來の規範にとらわれない生活をモットーとしたかみえる李白が、以上のごとく意外なほどに多く先人のあとを

追つてゐるのは興味あることであり、しかも、古い題を使
いながら新しい内容を盛つたもの、或いは古い内容に新し
い表現を與えたもの、があることなど、李白が樂府の世界
にむけた關心は、先にのべた雜曲・相和歌辭の特色につ
ながつて、何事かを語るように思われる。又、李白が直接

に模擬したと考えられる樂府詩の原作が、多くは齊梁時代
のものに屬すること、多くの影響をうけたと考えられる詩
人に、劉宋の鮑照^{註7}があるのも特筆してよいであろう。以上
を綜合して考えてみれば、古風第一首で「我が志は刪述に
在り、輝きを垂れて千春に映やかん」という主張を宣言し
た彼の、實踐的な歩みをとらえることができるのではない
か。すくなくとも、「建安よりこのかた、綺麗にして珍^{たつ}
ぶに足らず」(同上)と言ひ切る自信は、むしろ建安以來の
文學を熱心に讀んだことによつて裏づけられていたと言え
ないか。恐らく李白は、文學遺産のすべてに對して、旺盛
な食欲をもつていたであらう。と同時に、樂府題による詩
作という、一種の題詠方法——齊梁時代に盛行した——に
も意欲的に入つて行き、それをも自己の領域にまで擴げて

くるといふ、強靱な能力の持主であつたようである。舊い
題や先人の作から得たモチトフ、テーマを多彩に活用し、
そこに新しく李白自身の詩をつくりあげてゐるのはやはり
彼の天分の非凡さを示してゐるといつてよいだらう。

ともあれ、先人の作を糧としつつ、自己の感興を託して
いくというやり方で作られた彼の樂府詩は、その故にか弛
緩的——感情の波は大きい、その波の間隔は大どかであ
るといふ意味で——である。切迫した感情というよりも、
彼のもつ餘裕のどこかにのつかつて生まれてくるからであ
らうか。彼にとつては歌うことは緊張でなく、自己の才能
の限らないたのしみ、よろこび、更には慰安であつたかも
しれない。一氣呵成にかき下した自己の作品の、その作品
としての出來ばえをたのしげに眺める姿勢、その中の詩
が李白の持味であり、本領でもあらう。したがつて、緊張
をといた姿勢での彼の詩作が、より生き生きとした快樂を
うたい、空想的になり、饒舌になり、健啖であるのは、當
然のなりゆきである。

私がいまここで、李白の樂府をとりあげるためには、比

較の媒介として、従来の樂府詩についてふれておかなくてはなるまい。李白は何をうけつぎ發展させたか、あるいは何をもつとも擴大したか。便宜上、従来の樂府のテーマについて大まかな分類を作れば、大體次の五つに要約しうるであらう。^註

- 1、民衆のよろこび
- 2、王者への賛歌
- 3、民衆の悲しみ苦しみ
- 4、人生の無常、そして無情
- 5、仙界へのあこがれ

これらは、漢代の樂府古辭にすでに見られる分野であつて、漢以後の樂府が必ずしも民衆自身によつては作られず、知識人によつて擬作されるようになってからも、次第に發展する社會生活のテンポに従つて、内容にゆたかさを加えていつたものとみてよい。中國人にとつて價值のあるのは、實際にありうる事實であり、歴史であり、その倫理である。そうした實在・經驗の尊重に對して、空想の自由のびうる世界を擬作者である知識人にも獲得させたのは、

他ならぬ民衆のうたとして發達した樂府詩のジャンルであつた。ともかく、李白がそうした性格をもつ樂府の世界に情熱を示しているのは、やはり何らか、彼自身の好みや傾きをうかがわせるし、事實彼の作による「新歌謠曲」——實際にはうたわれなかつたにせよ——は、^註多かれすくなかれ、樂府本來のもつている性格の上に成り立つている。そして、それはおおむね、李白詩の性格を代表していると考えてよいように思われる。更によくいわれるように、もう一人のすぐれた詩人杜甫とのちがいを明確にするものをも示しているであらう。

二の1

萬物は變遷あくことなく、また榮枯盛衰は常なく人間をかえる。

そうした無常感は、老子・莊子などによつて、人間とのかかわりの中で問題とされ始めたが、それが顯著な意識として文學の領域にあらわれるのは、ほぼ漢代の作である古詩十九首の頃といつてよいであらう。人生無常の自覺と、

それに對處する詩人の敏感な魂は、緊迫した反應を示しつつ幾多の詩篇を生み出して來た。晉の陸機（A.D.261~283）は、とりわけ不幸な政治的境遇に一生を終えた詩人で、その美文と共に、深い悲哀感——人間全體をおそう運命、それが宇宙的な悲哀にまで連つてくるという感じ方——を凝縮させた點で特筆される。その彼の樂府「門有車馬客行」はうたう。

門に車馬の客あり、（いわく）駕して言は故郷を發てり。君を念えど久しく歸らざれば、迹に濡つかりつつ江湘を涉りたりと。袂を投げて門塗に赴う、衣を攬るも裳に及ばず。膺を拊ち客と攜りて泣く、涙を掩いて溫涼を紓ふ。邦族の間を借問すれば、惻愴 存亡を論る。親友多くは零落、舊齒は皆とく彫喪せり。市朝互いに遷易し、城闕或いは丘荒となれり。墳壠は日に月に多く、松柏鬱として芒芒たり。天道、信に崇替あり、人生安んぞ長きを得んや。慷慨して、平生を惟い、俛仰獨り悲傷す。（樂府詩集卷四十、文選卷二十八）

この作に擬したと考えられる李白の「門有車馬客行」は

李白の樂府について（島田）

次の如くうたう。

門有車馬賓	門に車馬の賓あり
金鞍耀朱輪	金鞍 朱輪に耀やく
謂從丹霄落	丹霄より落つるかとおもいにしに
乃是故鄉親	乃ち是れ故郷の親ならんとは
呼兒掃中堂	兒を呼びて中堂を掃い
坐客論悲辛	客を坐せしめて悲辛を論る
對酒兩不飲	酒に對えども兩に飲まず
停觴淚盈巾	觴を停め 淚 巾に盈つ
嘆我萬里遊	嘆ず 我が萬里の遊
飄飄三十春	飄飄たり三十春
空談帝王略	空しく談ず帝王の略
紫綬不掛身	紫綬 身に掛けず
雄劍藏玉匣	雄劍 玉匣に藏し
陰符生素塵	陰符 素塵を生ず
廓落無所合	廓落として 合う所無く
流離湘水濱	流離す 湘水の濱
借問宗黨間	借問す 宗黨の間

多爲泉下人 多くは泉下の人となる

生苦百戰役 生きては百戰の役に苦しみ

死託萬鬼隣 死しては萬鬼の隣に託す

北風揚胡沙 北風 胡沙を揚げ

埋翳周與秦 埋み翳おぼう 周と秦と

大運且如此 大運 且かつ此くの如し

蒼駕寧匪仁 蒼駕 寧なんぞ 仁に匪あらざらんや

惻愴竟何道 惻愴 竟に何をか道いわん

存亡任大鈞 存亡 大鈞に任さん（門有車馬客行・李太

白文集卷五・以下いずれも同集の卷次）

いうまでもなく、語彙の踏襲はかなり多い。

此れ漫りに前人に擬するのみに非ず。正に身世の

感を寫せり。陸機の詩と相出入すといえども、筆力や校

勁きく、氣象また大なり。

と、唐宋詩醇卷四の御批にも見える。ところで、陸機の

詩と、李白の詩とを比較してみた場合、御批のいう「筆力校勁く、氣象また大」とはいかなる印象から生まれた評なのであろうか。

陸機の詩は、作者の體驗したつぶさな感情の波に忠實で

あり、悲哀の深さは李白よりもつよい。戰亂に翻弄された

陸機が「人生安んぞ長きを得ん」とはき出した言葉は、誰

のものでもない、他ならぬ陸機だけの胸を襲つた感情に支

えられる獨白である。「俛仰獨り悲傷す」る姿は、運命に

いためつくされた人間が、苛酷な運命をひとりじつと耐え

ようとするものでもあろう。その苦しみや悲しみは誰とも

わかちうるものでないという意識がある。しかし李白にな

ると、腕をくみ、大空を仰いで慨嘆するのは、おそらく主

客ともども姿である。陸機の二十句にこめられた感情が、

李白の二十六句にいたつては、はなはだ外向性をおび、

「おはなし」的にさえなつている。陸機は「天道」のあて

のなさを、深く胸にとめたけれども、李白は「まあしばら

くは、すべてを天に依存しよう」という。現在の時點にお

ける無秩序に對してのみ、悲哀は強調される。「惻愴 竟

に何をか道わん、存亡 大鈞に任さん」の結びは、「進退存亡を知りて、其の正しきを失わざるもの、其れ唯、聖人なるか」（易・乾文言）といわれる聖者への依存があると思

われるし、萬物を造成する天——大鈞の機能へののつかり方には、「大運 且つ此くかの如し」という李白の哲理みたいなものもふくまれている。戦亂は人間の運命や位置を大きくかえ、人もわれも互いにその被害をこうむつたが、言つてみればそれは、

そうした世界の變化はひつきよう止むことなき一つの大きな流れである。吉凶禍福はその大きな流れからすれば、心をわずらわすにたりない一時のさざ波にすぎぬ。萬事は運命、人のさかしらておしはかろうとするのはむだなことだ。(中國文學報第八冊・金谷治「賈誼の賦について」より)

ということだ。漢の賈誼が、「鵬鳥の賦」において天道への論理を悲壯なおもいでうち立てようとした納得論の上に李白はうまくあぐらをかき、それを外に向けて語ろうとする點で樂觀にさえ轉じているのである。まさに李白の「大鈞」という語のとらえ方は、こう解釋してよいであろう。これは庶民の樂天的な成り行き主義に共通の要素であり、李白の苦くのななささの一面を物語る。この作が、恰好の前作を

李白の樂府について(島田)

得て、それに倣つたと考えられるだけに、それだけに又、「おはなし」的でもあつて、李白自身のなまの感情からある距離のある、いわば一つの作品であるとも感じられる。御批のいう「氣象また大なり」とは、陸機が個の位置で哀傷を内向していくのに比し、李白のこの樂天性と外向性とを指したものであろう。恐らく當時、安祿山の亂を経験した人びとは、李白と同じような心理で戦亂の現状と行方をうけとめていたであらう。李白が代辯したのは、まさしく、そうした人びととの共通の場での「感情」である。

萬物の常なき定めは、人間關係の無常にもつながる。李白の別の樂府詩「白頭吟」は、人の心の無常を、又、「おはなし」的にうたう。「白頭吟」はいうまでもなく、漢の文人司馬相如の妻卓文君が、他の女に自分を見かえられようとした時に作つたと傳えられるのが、その古辭である。李白の作は、二首のうち、一つが初稿であろうといわれる註10。如く、二首の内容はほとんど同じであり、初稿と思われる方はやや冗漫の感をまぬがれない。いずれにしてもこれは、卓文君の故事をうたつたもので、いわゆる古辭や鮑照の作

を追つたものであらう。元來の古辭は、

體しよきこと山上の雪の如く、皎しよきこと雲間の月の如く

なりしに、君に兩ふたつの意おもありと聞く、故に來きたりて相決

絶せん……願ねがわくは一心の人を得て、白頭まで相離れ

ざらんことを。(樂府詩集卷四十一)

とうたい、男にすてられかけた卓文君のねがいを素朴に

詠じている。これに對して李白は、もつと仔細に卓文君の

事件を粉飾する。「おはなし」としての構想がちやんとと

られてゐるといえるであらう。

錦水東北流

錦水 東北に流れ

波蕩雙鴛鴦

波は蕩うかす 雙鴛鴦

雄巢漢宮樹

雄は漢宮の樹に巢くい

雌弄秦草芳

雌は秦草の芳かしきを弄もぶ

寧同萬死碎綺翼

寧ろ萬死を同とにして綺翼を碎くだくも

不忍雲間兩分張

雲間ふたに兩つながら分張するには忍しのび

ず

比翼・連理のねがいを導入部分とするのは、そのねがいを裏切る次の部分を效果的にみちびくためである。

此時阿嬌正嬌妒 此の時阿嬌 正に嬌妒

獨坐長門愁日暮 獨り長門に坐して 日暮を愁う

但願君恩願妾深 但だ願う 君恩の妾を願りみることを

深きを

豈惜黃金買詞賦 豈惜しまんや 黃金もて詞賦をかう

を

相如作賦得黃金 相如 賦を作つて黃金を得たり

丈夫好新多異心 丈夫 新を好み異心多し

一朝將聘茂陵女 一朝將まさに聘まねかんとす 茂陵の女

文君因贈白頭吟 文君因つて贈る 白頭吟

東流不作西歸水 東流は西歸の水と作ならず

落花辭條羞故林 落花は條えだを辭はして故林を羞はず

ここではじめて卓文君のはなしにはいるのであるが、それはこれだけの由來をもつたものだというふうにながされて

いる。男の浮氣をたくみに一句にまとめてやがて、卓文君

の悲劇をうたい出す。またその最後の一段は、次に示すよ

うに思婦の風情をこまごまと語る體であり「かたりもの」

の情調をおびる。

兔絲故無情

隨風任傾倒

誰使女蘿枝

而來強繫抱

兩草猶一心

人心不如草

莫捲龍鬚席

從他生網絲

且留琥珀枕

或有夢來時

覆水再收豈滿杯

棄妾已去難重廻

古來得意不相負

祇今惟見青陵臺

李白は、閨怨の詩にもすぐれ、「玉階怨」や「子夜吳歌」

など、多くの名篇を残しているが、いづれもこの「白頭

吟」と同じようにシーンの造型にたくみである。「かたり

もの」的な情調は、てんめんたる卓文君の、くりごためい

兔絲 故より情無し

風に隨いて傾倒に任す

誰か 女蘿の枝をして

而來 強ちに繫抱せしむるや

兩草すら猶お心を一につにするに

人心は草だにも如かず

捲く莫れ 龍鬚の席

從かす 他の網絲を生ずるに

且つ留めよ琥珀の枕

或いは夢に來る時も有らん

覆水再び收むるも豈に杯に滿たんや

棄妾 已に去つて重ねて廻り難し

古來 意を得て相負かざるは

祇今惟見る 青陵臺（白頭吟、卷四）

たなやみの雰圍氣を想像させさえる。ここで「捲く莫れ
龍鬚の席、從かす 彼の網絲を生ずるに、且つ留めよ琥珀
の枕、或いは夢に來る時も有らん」と、未練のおもいを留

める卓文君の心情をうたうのは、作中人物への、李白のゆ
たかな連想の所産であり、讀者にもまた、卓文君のつお

いつ惱む姿をいろいろと推測させてもくれるのである。
こうしたシーン造型で「おはなし」的な内容をうたうも

のとして、かの、人びとのよく知る「長干行」も數えられ
るであろう。李白の能力は、設定したシーン、その中の

可能なかぎりの連想を、自在に働かせることに秀でていた
と思われる。

ところで、李白の時間推移の感覺、人生無常に對する考
え方はさきの「門有車馬客行」にもあらわれているが、更

にその自覺のしかたについて考えてみるに、現世的な快樂
との關連においてとらえられるようである。「君子有所思

行」の中で、

.....

歌鐘樂未休 歌鐘の樂しみ未だ休きざるに

榮去老還逼 榮は去りて老の還た逼れる（君子有所思行、

卷五）

.....

即ち「歡樂をまだ盡くしきらぬのに、早くも老が逼つて

來るとは、樂しみはまだこれからというのに」という。歡

樂をより多く獲得すること、これが李白のモットーであら

う。時間の推移は、後にものべるように、歡樂の邪魔もの

として認識されることが多い。たとえば、李白には珍らし

い四言の詩（胡震亨によれば四首である）「來日大難」は、人

命みじかく艱難多いこの世で、千歳のたのしみは「遊仙」

だと説くものであるが、その中に、

.....

今日酔飽 今日 酔い飽く

樂過千春 樂しみ 千春を過ぐ

仙人相存 仙人 相存われ

誘我遠學 我を誘いて遠く學ぶ

.....

授以神藥 授くるに神藥を以てし

金丹滿握 金丹 握に滿つ

蟪蛄蒙恩 蟪蛄 恩を蒙りて

深媿短促 深く 短促を媿す

思填東海 東海を填めんことを思ひ

強銜一木 強いて一木を銜む

..... (來日大難、卷五)

という句々がみえる。登仙の望みのかなつた夢の中で、

神藥を掌にあまるほど授けられた凡庸な人間の己れは、そ

の恩恵に値いするにはあまりにも蟪蛄（蟬）に似た命をし

かもたない。だからこそ、その命の短かく促しいのを深く

媿ずというのであり、仙人への御恩報じに、せめて一本の

木ずつでも口にくわえて、かの東海を填めようと思うとい

う、これらの言葉は、人生への暗い絶望とは無縁のもので

あろう。今日の樂しみは萬全であり、仙界との交わりさえ

も可能な李白においては、蟪蛄のような命の短かさが「媿

じ」であつても「天道、信に崇替あり、人生安んぞ長きを

得んや」(前出陸機「門有車馬客行」といわれるような悲壯さ

には到らない。すくいのない絶望感を人生の無常から感じ

とつた以前の詩人たちにくらべれば、「仙界」をたのしみ、今日を充實しうるものと感ずる李白は、屈托なく時間の推移をうけとめていると考へてもよいであらう。

二の二

李白の得意とする閨怨の詩は、詩語の背後にうかびあがる悲哀を、讀者につよく追體驗させるだけの味わいにすぐれているが、名絶とされる「玉階怨」は、まさしくそのよゆうな詩である。

玉階生白露 玉階 白露を生じ

夜久侵羅襪 夜久しうして羅襪を侵す

却下水精簾 却下す 水精の簾

玲瓏望秋月 玲瓏 秋月を望む(玉階怨、卷五)

この詩は、李白がもつとも敬愛したという齊の謝朓(464~499)から得たものである。謝朓の詩に、

夕殿 珠簾を下せば、流螢飛び復た息む。長夜 羅

衣を縫う、君を思いて此に何ぞ極まりあらんや。

(樂府詩集卷四十一、玉臺新詠卷十)

李白の樂府について(島田)

とあるように、これも秋の夜長に情人をおもう女のなげきをうつしているが、「夕殿」「珠簾」とあれば、「流螢」の點滅、女のすがたを描くとなれば「羅衣を縫う」、「長夜」は「思君」の連想をうむなど、感情表白が常套的にながれている。齊梁時代の修辭傾向が、ほとんどこうした常套さによつて陳腐な詩をうんだのであらうが、李白はそうでない。ひたすらに愛する人をおもう女の深い怨思を、一字の「君」の字を用いることもなく描き出している。玲瓏とさえわたつた秋月のもとで、露にぬれつつ久しい時を、君を戀うゆえに立ちつくす女の姿は、月が美しいだけに深い哀怨をたたえる。しかし、もし閨怨の情を切實にうたい出すことがこの詩の主な眼目であつたとしても、この風景は、イメージとして甘美なものである。たとへば、ここに一つの美人畫があるとす。それが女流畫家の手になつたか、或いは男性の畫家によつたものかというちがいは、その美人畫の味わいを決定的といつていいほどに變えるという。丁度それと同じように、李白のイメージは、女の怨思の姿を、李白自身の感情移入によつて造りあげたものであり、

それをもつとも效果的に、甘美なものとした點で、謝朓の詩にまさるのである。同じことは、もう一つの名絶「王昭君」にもいえるであらう。

昭君拂玉鞍 昭君 玉鞍を拂い

上馬啼紅頰 馬に上りて紅頰啼く

今日漢宮人 今日漢宮の人

明朝胡地妾 明朝 胡地の妾（王昭君、卷四）

王昭君が、美人であつただけに、馬に上る瞬間の光景はいたましく哀れである。そのいたましく哀れな光景は、二度とみられない美の瞬間ではなからうか。その瞬間を李白は適確にとらえて、言葉で再現してみせる。彼にとつて、この瞬時のイメージこそ、もつとも美しかつたのではないか。「紅頰」に露の涙をみる李白は、王昭君に同情をよせる以上に、その光景を楽しんだであらうとさえ想像される。それは、すでにすぎさつた事件であり、固定した「哀傷の對象」である。李白のこうした關心のもち方、もしくは眼は、一つの畫として許されるのであらう。

更にまた、謝朓に擬したと考えられる「邯鄲の才人、嫁

して厮養の卒の婦と爲る」では、うつろい易い人生と、時の流れにつれてうつりかわつた女の、懷舊の情をうたう。

妾本叢臺女 妾は本と 叢臺の女

揚蛾入丹闕 蛾を揚げて 丹闕に入る

自倚顏如花 自ら倚る 顔は花の如しと

寧知有彫歎 寧ぞ知らん 彫歎の有るを

一辭玉階下 一たび玉階の下を辭すれば

去若朝雲沒 去りて朝雲の沒するが若し

每憶邯鄲城 毎に憶う 邯鄲の城

深宮夢秋月 深宮 秋月を夢みしを

君王不可見 君王 見るべからず

惆悵至明發 惆悵 明發に至る（邯鄲才人嫁爲厮養卒婦、卷五）

謝朓の詩は左の如くである。

生平は宮閣の裏に、出入 丹墀に待す。笥を開きて

羅縠を方べ、鏡を窺いて蛾眉を比す。初め別れしより

意未だ解けず、去ること久しくして日に悲しみを生ず。

願領自ら識らず、嬌姿 故の姿を餘す。夢中忽ち髣髴

たり、猶お言う譎私を承くと。(樂府詩集卷七十三・玉臺新詠卷四)

この謝朓の詩は、はなやかな昔日のくさぐさのことも、を思い起して、なおもその夢を追う女の姿に重點があり、對句の頻用と、固定的な表現は、その今昔の感を類型化している。「羅穀を方うすぎぬべる」時、「蛾眉を比くらする」時、それらは、盛時の美を表現する常套の語であらう。更にいえばこの謝朓の詩は、女の現在のかなしみそのものをうたつたものであり、そのかぎりにおいて、「人生における彫歇」が自覺されたものとしてうたわれていないのに、李白の詩は先ず人生の推移を問題にする。花の如き顔にも衰えは必ず來るといふ悟りがその背後にあるために、一面では謝朓の詩のような、戀々とした風情、悲しみへの求心性にとぼしいともいえるが、榮枯盛衰はさけることのできない現世の約束ごとであつてみれば、時が流れ動くのにつれて人間が變つていくのは當然だという意識がうけとられ、かえつて李白の人生觀を浮ぼりにして興味深い。李白は、時の流れを悲傷の對象とはしない。「寧んぞ知らん彫歇の有る

李白の樂府について(島田)

を」というのは、この世には「彫歇」があつたのだと氣づいたときのおどろきにも似ている。盛衰は自明のことなのだから、人生の「動」の相すがたにのつかりつつ己れを知りさえすれば、自ずと人生の方途も見きわめられようというものだ、ともいいたげな姿勢が李白にはある。時の流れと共にうつりかわつた位置にある女の、懷舊の風情がさらさらと感じられるのは、そのためであらうか。

思婦のうたとして、これも有名な「烏夜啼」は、梁の簡文帝や北周の庾信などにも、同題の作をみる(樂府詩集卷四十七)が、李白の詩がよりすぐれるように思う。唐宋詩醇は、評して、

語淺く意深し、樂府の本色なり。(唐宋詩醇卷二)

という。樂府の本色を、語淺く意深いものと規定するのは、このことは後でのべるけれども、樂府への傾倒を示す李白詩の性格と關連して興味ある言葉である。「烏夜啼」はうたう。

黃雲城邊烏欲棲 黃雲城邊 烏棲まんと欲し

歸飛啞啞枝上啼 歸り飛びて啞啞と枝上に啼く

機中織錦秦川女 機中錦を織る秦川の女

碧紗如煙隔窓語 碧き紗 煙の如く 窓を隔てて語る

停梭悵然憶遠人 梭を停め 悵然 遠人を憶う

獨宿孤房淚如雨 獨り孤房に宿して 淚 雨の如し

(鳥夜啼、卷三)

「黃雲」は、「黃雲千里を蔽いて、遊子何れの時か還ら^{かえ}ん」と使われるように、遠き旅にある人への思慕のたかま

りと、それにさからう憂鬱な自然の姿を示した言葉でもあらうか。鳥が啼けば遠い所の人がおもわれてならぬ、だが、たそがれの氣はたちこめて、今日も又空しく暮れていく。

かなしみを豫約する外界の光景、そして、そのかなしみは機を織る思婦の姿に集中する。女は錦を織つていろいろらしい

うすい碧の紗のとばりが、たそがれのもやに煙つて、それとは見定めがたいけれども、ひつそりと機の前にたたずまう秦川の女は、何事を語らんとはする。梭とる手も自ずから

らにとまつて、去りし人を憶いつつ、ひとり涙で頬をぬらす。鳥が啞啞となき、機の音が絶え、すすりなく女の、かそけき聲。寒々とした城邊の夕の景色の中にかぶ紗の色

あいのほのかさ。更に涙のしづくに至るまで。李白は實に美しい風景を描き出している。怨思は、思婦のせきあげるさびしさであり、悲しみであり、戀しさをうたうものである。美しいとみるのは残酷にすぎるともれない。しかし李白の詩は、その涙までが、讀むものに甘美さを傳える。六朝期の多くの戀愛詩にあらわれる細微さに對する嗜好や、ほのかなもののもつ美への眼の配り方などが、更に洗練されてこの詩に示されているといえるだろう。

その他、思婦をうたつたものはかなりあるが、いずれの場合も、ロマネスクな美意識——視線——でうたわれているようであり、更にいえば、それらは甘美哀怨であつてイメージも美しいけれども、李白その人の直接の感情投入は多くないように感じられる。かわつてうたつていられるけれども、李白自身は、思婦の姿を客觀的に眺める側に立つてゐるからである。ただそれにもかかわらず、今日の我々にも、李白のとらえたイメージは、ほとんど彼のイメージそのまま、甘美な味わいを伴つて擴大再現する。深い切實な悲しみよりも、哀艶さや甘美さを我々に傳える。これが李白詩

の一つの特徴をなしているといえよう。それゆえに、實在からはみ出したところでイメージが作られ展開する詩が多い。そうして作られたと思われる寫景の詩のはなやかさも又、類がないであろう。その例を一つあげるとすれば、「採蓮曲」がある。

若耶溪旁採蓮女 若耶溪の旁に蓮を採る女は

笑隔荷花共人語 笑いて荷花を隔てて人と語る

日照新粧水底明 日は新粧を照らして 水底に明らか

に

風飄香袂空中舉 風は香袂を飄えし 空中に舉がる

岸上誰家遊冶郎 岸上誰か家の遊冶郎ぞ

三三五五映垂楊 三三五五 垂楊に映ゆる

紫騮嘶入落花去 紫騮は嘶きて落花に入りて去る

見此踟躕空斷腸 此れを見て踟躕し空しく斷腸す

(採蓮曲、卷四)

「樂府詩集」(卷五十)にもみえるように、これは、蓮を採りつつ遊びたわむれる婦人のさまを詠ずるもので、華麗な風景の寫生である。樂府詩では、蓮は憐(こもに音 Iien)

李白の樂府について(島田)

のかけことばであるゆえに、これは若い娘たちが戀を獲得しようとする姿かもしれない。荷花をつむのに新妝をこらし、香袂をひるがえす若い女たちは、詩經にあらわれるような素朴な姿でない。また、この題の詩の最初の製作者として記される梁武帝の作、

五湖に遊び戯むれ 蓮を採りて歸る。發ける花 田

べる葉 芳わしさ衣を襲う。君が爲に 儂歌わん 世

に希なる所を。世に希なる所は 玉の如き有り。江南

の弄、採蓮の曲。(樂府詩集卷五十)

とくらべてみても、意識された華麗さをみる。若い女たちの、はなやぎ、公達のいきな姿、しばらくの間の美しい緊張、やがて女たちの軽い失望。それらに對する、李白の軽い揶揄まで感じさせるこの詩は、感懷の重々しさや情念の緊張、更に燃焼などというものはちがった方向に、李白の筆がのびるものだということを示しているようである。この詩を評して、

綺にして豔ならず、此れ自ずと天分に關われるか。

(唐宋詩醇卷三)

と唐宋詩醇御批はいう。いかにも李白は天分に恵まれた詩人であつた。その天分の最もよく發揮された場はどこであつたか。

それらを以下でのべたいと思う。

二の三

「遊仙詩」といえば、先ず晉の郭璞を思い出すが、さきへのべた樂府詩の主題となる五つ分類のうち、遊仙へのあこがれを、非常にしばしばうたつた詩人として李白の名は忘れられないであらう。趙翼註12もいうように、彼は若い頃から「仙」への志をもつていたらしい。

李白が題とした「有所思」(「思註13う所有り」)は、元來は漢の鼓吹鐃歌に含まれる題であり、古辭がうたう男女の不和訣別を歌うものであるが、李白以前の十九人の詩人たち——謝朓・梁簡文帝・沈約・沈佺期など——は、その系統をひいて大よそは別れた佳人への思慕を歌う詩を作つてゐるのに對して、李白は「我は仙人を思註14う」とうたう。李白が思うのは、佳人でなくて仙人なのである。

我思仙人 我は仙人を思註14う

乃在碧海之東隅 乃ち碧海の東隅に在り

(古有所思、卷四)

これはおそらく、古辭註14の「思註14う所有り、乃ち大海の南に在り」という初句から得たものであらうが、大海のかなた、もしくは高山の白雲の邊に李白が連想するのは、こうした「仙」の世界であることを示すよい例である。先人が佳人への思慕をうたうのに對し、彼は仙人を戀う。ではそんなに彼のあこがれた「仙界」とはいかなるものであつたのだろうか、すくなくとも、彼の腦裡にひろがつてゐる「仙界」とは? 「春日行」にいう。

深宮高樓入紫清 深宮の高樓 紫清に入る

金作蛟龍盤繡楹 金こがねは蛟龍なと作りて繡楹むすを盤むする

佳人當窓弄白日 佳人窓に當りて 白日を弄し

弦將手語彈鳴箏 弦は手語を將もつて 鳴箏を彈むすず

春風吹落君王耳 春風吹き落つ 君王の耳

此曲乃是昇天行 此の曲は乃ち是れ 昇天行

春のよき日、宮廷で美女が琴をかかなでゐる、その曲の

名は「昇天行」。「昇天行」とは、樂府解題註15にいう如く、この世から神仙界へ逃避したいという類のものである。たとえば、鮑照の「升天行」を評して、方虛谷は「世故を厭う、而して神仙を求む」という。そうした曲を耳にした次の瞬間、李白の連想は仙界へとひろがる。

因出天池泛蓬瀛 因つて天池を出でて 蓬瀛ほうように泛ぶ

樓船燈沓波浪驚 樓船しゅうせん燈沓 波浪驚く

三千雙蛾獻歌笑 三千の雙蛾 歌笑を獻じ

搗鐘考鼓宮殿傾 鐘を搗ち鼓を考たいて宮殿傾く

萬姓聚舞歌太平 萬姓聚舞して太平を歌う

我無爲 我無爲にして

人自寧 人自ずから寧やすし

三十六帝欲相迎 三十六帝 相迎えんと欲す

仙人飄翻下雲軒 仙人飄翻 雲軒を下る

帝不去 帝去らず

留鑄京 鑄京に留まる

安能爲軒轅 安んぞ能く軒轅となり

獨往入宵冥 獨往 宵冥に入らん

李白の樂府について（島田）

小臣拜獻南山壽 小臣拜して獻ず 南山の壽
陛下萬古垂鴻名 陛下萬古 鴻名を垂れよ

（春日行、卷三）

「萬姓の聚舞して太平を歌う」よき治世は、「我無爲にして人自ずから寧やすし」という、老子（老子第五十七章）の秩序觀のつとつた世の中である。それを嘉よしうるすぐれた次元の世界、それこそ「仙」の第一條件だと李白はいう。彼にとつて「仙界」は、すくなくとも現實社會に對する不信や絶望の結果として身を寄せるべき世界ではなかつた。彼には、價値を超越した無限の可能をもつ領域、Pridelessなまでのすぐれた次元、が意識されている。完全な幻想の所産を、かくも常に大手をふつてうたいあげるのは、そうした無限の可能性をもつ正義を求めていたからであらう。晩年、天下の亂れに際して彼の欲した最大の夢は、先ず何よりも政治的な平和であつた。仙へのあこがれが晩年ほど大きくなつていつたのと、これはよい符合を示すであらう。「春日行」は、樂府詩集によれば、鮑照・李白・張籍の三者の作が残るのみで、若い男女の春の日の行樂を、三言で

からやかにうたつた鮑照の作から、李白のえたものは、春景をうたうことだけであつて、それはむしろ君主治政の善を希望する發想をみちびいてゐる。ところで、李白の認識する「仙界」は、次の詩「山人勸酒」でもみられるであらう。

蒼蒼雲松 蒼蒼たる雲松

落落綺皓 落落たり綺皓

春風爾來爲阿誰 春風爾の來るは阿誰の爲ぞ

蝴蝶忽然滿芳草 蝴蝶 忽然として芳草に滿つ

秀眉霜雪顏桃花 秀眉は霜雪 顔は桃花

骨青髓綠長美好 骨青く髓は綠にして長しえに美好

稱是秦時避世人 稱すらく是れ秦時世を避けし人なり

と

勸酒相歡不知老 酒を勸め相歡んで老を知らず

各守麋鹿志 各々 麋鹿の志を守り

恥隨龍虎爭 龍虎の争いに隨うを恥ず

歛起佐太子 歛たもち起つて 太子をたすけ

漢皇乃復驚 漢皇 乃ち復た驚く

顧謂戚夫人 顧りみて戚夫人に謂う

彼翁 羽翼成れりと

歸來商山下 歸り來る 商山の下

泛若雲無情 泛として雲の情なきが若し

舉觴醉巢由 觴を舉げて巢由に醉す

洗耳何獨清 耳を洗う 何ぞ獨り清き

浩歌望嵩岳 浩歌して嵩岳を望めば

意氣還相傾 意氣 還た相傾く (山人勸酒、卷四)

李白が山を愛し仙を愛したことは武部利男著「李白小傳」^{註17}にたのしく語られている。しかも、決して世の中にそ

むいての山遊びでもなく遊仙でもないとい説かれている。李白は人生を積極的に精一杯たのしもうとした人間であり、

従つて快樂をうたうことにかけては、實に闊達であり奔放である。放膽でさえある。^{註18}だがこの詩で示すのは、彼自身

が自負していたところの「天の我が材を生ずるは、必らず用あればなり」(將進酒)という人生でのつとめ、そのつと

め方についての彼の夢である。かつて、秦の暴政をさけて山にかくれた四賢人が、忽然とあらわれて漢の帝室の不正

な太子位篡奪を未然に防ぎ、目的を果すと、それ以上の行

爲や報酬を求めることなく山に歸つて行つたという、そういう水際立つた仕事の場合は、他の詩篇にもしばしばみられるように、彼のつよい願いの一つであつた。そして、その進退が、みごとであればあるほど、また天下國家の大事に有効であればあるほど、世人は喝采を惜しまない。「泛として雲の情なきが若く」に超越の場に歸る。正義を發動する萬能の力へのあこがれは、李白の政治的境涯が、理想と逆になればなるほど、彼の脳裡で擴大していつたと思われ。山と仙とに心ゆくまでひたりつつ、夢想の中に遊ぶ姿を示す「太山に遊ぶ六首」の如きは、自己の領域を仙境にまで擴大することに積極的だつた彼の面目をよく表わしたものである。定められた枠の中にはまることのきらいだつた彼にとつて、何ものにも拘束されることのない境地は、恐らく彼のこの價值觀にピッタリする夢の仙界であつただろう。傳記としてすぐれる王瑤の著書「李白^{註19}」は、この點を適切に説明する。彼の求仙訪道は、爛熟した盛唐の諸條件の中での、一つの、また彼なりの社會的活動——世俗的生活なのであつた。

李白の樂府について（島田）

しかしながら、それらとてもなお李白詩の主要な部分とはいいがたいのであつて、彼はやはり、理想的な自由の享受をこそ愛した詩人である。李白は、俗界が地道な人間の努力で正義の世界となるという自覺にとほしい。仙界のかすみをおびた清淨さ、その中に自からを假託した時に誰しもがひたれるいい氣持、旨酒と、心を共にする仙人と、こうした空想のたのしさは俗界の小つぽけさのゆえに、この上もない味をもつ。奔放で自由に生きる、その自由は、これらのたのしみを約束してくれるであろう。その故に、自由が阻まれる時こそ、彼は現實社會のくさぐさを、いきどおりと蔑視をもつて思い出すのであつて、近頃いわれるように熱烈な愛國詩人という稱號はあたらなないと考えられる^{註20}。政治に關心をもつのが中國の人びとの常であるごとく、彼も祖國を愛し、祖國の山河を愛した人になりはれないが、彼の詩のもつ「祖國愛」が、直ちに愛國主義と結びついて、彼の詩の價值を決定するほどに第一義的ではないことを見落してなるまい。

彼における政治への關心は、功成り、名遂げ、任を果し

てのちの隱遁という、理想主義的な英雄的な進退にむしろ重點がある。そうした一連の進退のあり方は、思うに任せぬ世の中で、あくせく暮している多くの夢多い凡人たちのはかないあこがれと、共感をよぶ因素を含むものといえよう。だからこそ、李白の詩は、詩語の大きさを、現實性のなさにもかかわらず、ひろく人びとに愛されるのではあるまいか。

二の四

白は識見汚下、十首のうち九は婦人と酒を説く、然れども其の才は豪俊、亦取るべきなり（茗溪漁隱叢話卷六に、王安石の語として引く）

といわれるように、李白の詩が婦人と酒のことばかりをうたつてゐるとして、良く思わない學者もかなりあろう。しかし、李白の詩はそれにもかかわらず、今日までひろく讀まれ愛されて來た。しかも、愛される詩のうちのほとんどが、婦人と酒をうたつたものなのである。ここで、その李白詩の本領ともいふべき「酒」、つまり人生の快樂と李

白との關係についてふれてみたい。

「酒」といえば、中國の詩人の中でもつともよく思い出されるのは、陶淵明（AD365~427）であろう。ここではふれないけれども、陶淵明が「酒」にしたしんだのは、孤獨のさびしさを埋めるためでもあつたと思われるが、李白では異つた意義をもつ。彼がもつともうたうのは、さびしさのゆえの「酒」ではなくて、「たのしい酒」そのものである。

さきにもすこしのべたが、時間の推移の、李白における認識は、快樂への志向と密接な關係をもつてゐる。たとえ

ば「烏棲曲」

姑蘇臺上烏棲時 姑蘇臺上 烏棲まんとする時

吳王宮裏醉西施 吳王の宮裏 西施酔いたり

吳歌楚舞歡未畢 吳歌楚舞 歡び未だ畢きざるに

青山欲啣半邊日 青山啣まんと欲す 半邊の日

銀箭金壺漏水多 銀箭金壺 漏水多し

起看秋月墮江波 起ちて看る秋月の江波に墮つるを

東方漸高奈樂何 東方漸やく高し 樂しみを奈何

(烏棲曲、卷三)

の如く、歴史の故事を氣にとめずに一讀すれば「樂しみを奈何」というふうな、樂しみを更に欲する言葉とうけられるような句をもつ詩がある。この詩は、歡樂の終焉、時の経過、など、彼の別の詩「蘇臺覽古」(懷古の分類にふくまれる)に現われる歴史事實をふまえたものであり、蕭士贇の注でも、姑蘇臺・吳王の末路を暗示し、唐の王室の過度の奢侈をいましめたものと説いている。更に、詩にもみえるように、「銀箭金壺 漏水多し」^{註21}と、推移する時を感じた句もある。それにもかかわらず、吳歌楚舞のたのしみがつきるのを惜しむ方向での「樂しみを奈何」という趣きがつよいように感じられるのである。

深く國風刺詩の體を得たり、其の美を盛言するも、その美ならざるもの自ずから見わる。(蕭士贇注)

樂しみ極まりて悲しみ生ずるの意、寫し得て微妙、

(唐宋詩醇卷二)

と、寓意をみとめる評がほとんどであるとしても、「時に及んで應に樂しみをなすべし」という傾むきをつよくも

李白の樂府について(島田)

つていて、むしろ寓意は重大なものでないといつたら、いけないであろうか。^{註22}月がおち、時計が時の経過を告げるのを見れば、たのしみを更に燃焼させようとする意欲かられる、とする方が、むしろ李白にとつてはピッタリする。それは、次の「短歌行」で、もつと鮮明にうかがわれる。

白日何短短 白日 何ぞ短短たる

百年苦易滿 百年 苦はだ滿ち易し

蒼穹浩茫茫 蒼穹 浩として茫茫

萬劫太極長 萬劫 太極 長し

麻姑垂兩鬢 麻姑 兩鬢を垂れ

一半已成霜 一半 已に霜を成す

天公見玉女 天公 玉女を見て

大笑億千場 大笑す 億千場

吾欲攬六龍 吾れ六龍を攬し

迴車挂扶桑 車を廻らして扶桑に挂けんと欲す

北斗酌美酒 北斗もて美酒を酌み

勸龍各一觴 龍に勸むること各々一觴

富貴非所願 富貴は願うところ非ず

與人駐顏光 人の與に顏光を駐めん（短歌行、卷五）

「短歌行」について、樂府解題はいう。

短歌行は、魏武帝が、「酒に對いて當に歌うべし、人生幾何ぞ。」晉の陸機が、「高堂に置酒し、悲歌しつ觴に臨む。」皆當に時に及んで樂しみを爲すべきを言う也。（樂府詩集、卷三十）

魏武帝・晉の陸機がうたうものは、解題のいうごとくである。「酒に對いて當に歌うべし、人生幾何ぞ」「高堂に置酒して、悲歌しつ觴に臨む」とうたう彼らには、一種の緊迫した感情や、環境への絶望が意識されていて、それらへの反撥として快樂の充實を求めようとする聲が生まれたと感じられる。そのゆえに、その聲には悲痛なひびきがかめられている。だが李白は、むしろ弛緩的な感情の中で、快樂への志向を謳歌する。「六龍を攬し、車を廻らして扶桑に挂けんと欲す」という李白の空想は、人生短促などという無常感に惱まされることがない。「北斗もて美酒を酌み、龍に勸む各々一觴」と、彼の夢想は大言的であり、空言にひとしいまでにのびていく。北斗七星で美酒を酌み、

天翔ける龍どもに一ぱいずつのませてやろうなどという言葉は、李白でなければいえないところの、自由な空想の所産であろう。こうした奔放さは、「白日何ぞ短短たる、百年苦はだ滿ち易し」という、はじめの句の意味を限定する。「百年」でも短かいと思う焦れ方であろう。ともかく百年くらいはすぐに經つのだ、刹那をこころよき樂しみにみたくして、美酒をくみ、空想をひろげてわかわかしく生きよう。そうした願意を用意する言葉なのである。

更にまたそのことを示すのは「將進酒」である。

君不見黃河之水 君見ずや 黃河の水天上より來るを

天上來

奔流到海不復回 奔流 海に到りて復び回らず

君不見高堂明鏡 君見ずや 高堂の明鏡白髮を悲しむ

悲白髮

朝如青絲暮成雪 朝には青絲の如くなるも 暮には雪

と成る

人生得意須盡歡 人生得意 須らく歡を盡すべし

莫使金樽空對月 金樽をして空しく月に對せしむる莫

れ

天生我材必有用 天我が材を生ずるは 必らず用あれ

ばなり

千金散盡還復來 千金散じ盡せば 還た復た來る

烹羊宰牛且爲樂 羊を烹 牛を宰して 且つ樂しみを

爲せ

會須一飲三百杯 會かならず須らく一飲三百杯なるべし

岑夫子 岑夫子

丹邱生 丹邱生

進酒君莫停 酒を進む 君停むる莫れ

與君歌一曲 君が與たもに一曲を歌わん

請君爲我傾耳聽 請う 君 我が爲に耳を傾むけて聽

け

鐘鼓饌玉不足貴 鐘鼓饌玉 貴ぶに足らず

但願長醉不願醒 但だ長醉を願いて醒むるを願わず

古來聖賢皆寂寞 古來聖賢 皆 寂寞

惟有飲者留其名 惟だ 飲む者の其の名を留むる有り

陳王昔時宴平樂 陳王 昔時 平樂に宴し

斗酒十千恣譎諠 斗酒十千 譎諠を恣ほしまにす

主人何爲言少錢 主人何すれぞ 錢少しと言うや

徑須沽取對君酌 徑たちに須らく沽取して 君に對むかいて

酌むべし

五花馬 五花の馬

千金裘 千金かむじやうもの裘

呼兒將出換美酒 兒を呼び將ち出でて美酒に換えしめ

與爾同銷萬古愁 爾と同じく銷けさん 萬古の愁

(將進酒、卷三)

まことに威勢のいい詩である。「萬古の愁」とある「愁」が如何なるものかは問題であるか、ここで私のうけとる感じは軽い。漢魏六朝と代々、詩人たちは多くの「愁」をうたいつづけてきたが、その先人たちの課題は解決されていくわけではない。思いを沈めれば皆その「萬古の愁」にとりつかれるだろうが、たといそれを考えたとしても、先人たちの思考以上のものが出てくる筈もなからう。歴史の波にのみこまれるのは、所詮人間に定められたみちなのだから。そういう愁いごとは今さら問題にしてもはじまらない、

さあ大いに酒をのもうじやないか、という感ではなからうか。李白は表現の大きい詩人であつて、必らずしも深甚な愁にとりつかれていたとは考えられないのである。試みに「萬古」の用例を李白集の中に求めれば、^{註24}二十四、そのうち「萬古の愁」とつづくのは一度だけであり、「愁」の内容が「萬古」の歴史を藏したものだといつても、彼の神經を痛めつけるほどきびしく内におしこめられた「愁」というようなニュアンスはもちにくい。「萬古」は李白にとつて、はずみのいい使い易い言葉ではなかつたか。世に用いられないいきどおりや憂愁を抱いていたとしても、「我れをして身後の名あらしめんよりは、如かず、即時一杯の酒」^{註25}の方に傾いてゐるであらう。ちなみに、「將進酒」について郭茂倩はいう。

古詩に曰う、將に酒を進め大白に乗ぜんとすと。大略、飲酒放歌を以て言を爲す。(樂府詩集卷十六)

梁の昭明太子もこの題下に遊樂飲酒をうたつており、李白もその本義にもとずいて作つたのであらう。更に一方では、^{註26}詹鏞も記すごとく、鮑照の「行路難」第五首に擬した

とも思われるところがすくなくない。

君見ずや河邊の草、冬時は枯死するも、春には道に満つるを。君見ずや城上の日、今隕れ没して盡き去るも、明朝復た更に出づるを。今我れ何れの時にか當に然るを得べき、一たび去らば永しえに滅えて黄泉に入るべし。人生苦しみ多く歡樂少なし、意氣敷腴は盛年に在り。且くは願う、志數は相就ることを得て、牀頭恒に沽取の錢有ることを。功名竹帛は我が事に非ず、存亡貴賤は皇天に付せん。(鮑照「行路難」第五首)

この詩の語彙や語法は、李白の詩にも多く借用されている。「君不見」の使い方も同じであり、「沽取錢」もみえる。ただ、初四句の「君見ずや」の内容となつてゐるものにおいて、既に鮑照と李白は異なる。鮑照は、自然界の變化には「ふたたび」があるのに、「我」に迫つてくるものは「永滅」だけだという。すなわち、現世への強い執着からひらかれ觸發された「飲酒」への志向である。ところが、李白がうたうのは、自然の中でもかえらぬ相「黄河の水の奔流」であり、それと同じく人間も老いを得るといふ。自

然と人間との變貌・推移は、同列の現象である。彼は人生に向つて深刻な顔つきをする必要に、自分を追いたてたことのないか、鮑照が「惟だ飲者の其の名留むる有り」が問題なのであつて、鮑照のように「聖賢」も「貧賤」だつたのだ、「何んぞ況んや、我輩 孤にして且つ直なるをや」と、なげくのではない。現世的な執着をつよくもつ鮑照は、貧賤を我が身のみかと、聖賢にひきくらべてゐる、そこには強々「行路難」の慨嘆

李白の樂府について（島田）

がききとれるのである。李白は、鮑照のような油つこい關心を、人間社會に對してもち合せていなかつたのではあるまいか。

それは題を同じくする李白の「行路難」第一首と、鮑照の「行路難」第六首との間のちがいがいからも、同じようなことがいえる。李白はうたう、

金樽清酒斗十千	金樽の清酒	斗十千
玉盤珍羞直萬錢	玉盤の珍羞	直 <small>あた</small> 萬錢
停杯投筯不能食	杯を停め筯を投じて	食う能わず
拔劍回顧心茫然	劍を抜き回顧して	心茫然
欲渡黃河冰塞川	黃河を渡らんと欲すれば	冰川を塞ぎ
將登太行雪滿山	太行に登らんとすれば	雪 山に滿つ
閑來垂釣碧溪上	閑來 釣を垂る	碧溪の上 <small>ほと</small>
忽復乘舟夢日邊	忽ち復た舟に乗じて	日邊を夢む
行路難	行路難	
行路難	行路難	
多岐路	岐路多し	
今安在	今安くにか在る	

長風破浪會有時 長風浪を破る 會らず時有り
直挂雲帆濟滄海 直ちに雲帆を掛けて滄海を濟らん

(行路難 卷三)

しかし鮑照は次のごとくうたう

案に對いて食う能わず、劍を抜きて柱を撃ち 長歎
息す。丈夫 世に生まれて會らず幾時ぞ、安んぞ能く
蹀躞して羽翼を垂れんや。棄置、官を罷めて去り、
家に還りて自ずから休息す。朝に出て親と辭し、暮
に還りて親の側に在り。兒の牀前に戯むるを弄し、
婦の機中に織るを見る。古より聖賢は盡とく貧賤、何
んぞ沉んや我輩孤にして且つ直なるをや。

(鮑照 「行路難」第六首)

鮑照の自尊心が、現實の裏切りにあつて、傷つき、挫折
し、焦立つているのにくらべて、李白は悠々としている。
みちがふさがれば、釣糸をたれ、夢をみて、いつもこん
なことばかりではあるまいと、悠然とこまえている。鮑照
などが、事態を直視して、自己の中に現實の諸現象をひき
つけてうたうのに對して、李白は自分のことでもそれを、

いつの間にか、外の方になげ出してゐる。内心くよくよす
るといつた屈折のしかたで惱んだりはしない。どうやら李
白にあつては、この世に對する秩序感覺が現實の杵をはみ
出し、「行路の難き」なげきも、超越した世界に連なるや
いなや消えていくようである。また、刹那を快樂にみたそ
うとする姿勢は「對酒行」(閑適の分類に含まれる)にもうか
がえる。

勸君莫拒杯 君に勸む 杯を拒む莫れ

春風笑人來 春風 人を笑いて來る

桃李如舊識 桃李 舊識の如く

傾花向我開 傾ける花 我に向いて開く

流鶯啼碧樹 流鶯 碧樹に啼き

明月窺金罍 明月 金罍を窺う

昨日朱顏子 昨日は朱顏の子なりしに

今日白髮催 今日日は白髮催がす

棘生石虎殿 棘は生ず 石虎の殿

鹿走姑蘇臺 鹿は走る 姑蘇の臺

自古帝王宅 古より 帝王の宅

城闕閉黃埃 城闕 黃埃を閉ず

君若不飲酒 君若し 酒を飲まずんば

昔人安在哉 昔人 安くに在りや (對酒、卷二十三)

らんまんたる春景のもと、酒をこそ飲めとうたう。その第一首は、ここには引用しなかつたが、同じように「酒に對いて肯えて飲まざるは、情を含んで誰をか待たんとはす」という。楊齊賢は次の古詩をこの詩の祖とする。

浩浩として陰陽移る、年命 朝露の如し。人生忽として寄の如し、壽に金石の固き無し。萬歲 更相い迭りて 聖賢も能く度るもの莫し。服食神仙を求むれば、多く藥に誤まらる。しかず、美酒を飲み、糲と素とを被服するに。(古詩十九首第十三首)

古詩には、「萬歲 更相い迭りて、聖賢も能く度ることのなき」なげき、不安な人生にあつては、聖人賢子でさえも、時間にうちかつことはできないのだから、というギリギリの姿勢がある。人生への執着ともいえようか。それは、魏武帝の「短歌行」や、陸機のそれにもつながるものである。魏武帝はいう、

李白の樂府について(島田)

酒に對いて當に歌うべし、人生幾何ぞ。譬えなば朝露の如く、去る日は苦はだ多し。慨いて當に以て慄むべし、憂思忘れがたし。何を以て憂いを解かん、唯杜康のみ有り……

人生の短かさに、敏感な詩人の魂は憂いとざされて底ふかくしずむ、それを銷しうるのは、唯、杜康——酒——のみという。また陸機はいう、

高堂に置酒し、悲歌しつづつ觴に臨む。人壽幾何ぞ、近くこと朝の霜の如し。時は重ねて至ることなし、華は再び陽かず。蘋は春を以て暉り、蘭は秋を以て芳ばし。……

人生は短かいが故に、その最大の利那を凝視する詩人は、最大の瞬間の次に約束されている衰滅に心をえぐられていく。華の陽く時間は美しいが短かい。次にはしおれ枯れる運命しかないという。情熱が燃焼する場、あるいは凝縮する點を、再びはもう戻らないという悲哀をこめて、はりつめた意識のもとにうたつているのである。だが、李白はちがう。彼は、ぐつと大きく伸びうる半徑が圓を描くように、

イリュージョンを擴大し、讀者の氣をうばう。あたかも遠心力の大きさのごとくに。やがて李白のうたう快樂は、快樂そのものとして自在にひとり歩きをさえ始めるのである。

「前有樽酒行」について、乾隆御批は次のように評する。即ち白の云う所の、浮生夢の若し、歡を爲すは幾何ぞの意、寫し來つて偏えに自ずと細致、是れ一味に豪放なるにあらず、又齊梁卑靡の音ならず、故に妙、

(唐宋詩醇、卷二)

春風東來忽相遇 春風東より來りて 忽ち相い過ぐ

金樽潦酒生微波 金樽の潦酒 微波を生ず

落花紛紛稍覺多 落花紛紛 稍多きを覺ゆ

美人欲醉朱顏酡 美人醉わんと欲して 朱顏酡たり

青軒桃李能幾何 青軒の桃李 能く幾何ぞ

流光欺人忽蹉跎 流光人を欺きて 忽ち蹉跎たり

君起舞 君起ちて舞え

日西夕 日は西に夕べなり

當年意氣不肯平 當年の意氣 肯えて平らかならず

白髮如絲歎何益 白髮絲の如くにしてのち 歎ずるも

何の益かあらん(前有樽酒行、卷三)

これまであげてきた詩にも、しばしば「人生幾何ぞ」の言葉がみえたが、ここでもその聲はある。しかし、先人たちが未來への絶望の故にうたつた「人生幾何」も、ここでは現在の快樂を充實させるための強調の言葉となる。こよなくたのしい風景の展開、いくばくもない人生においてはこれをこそつかめというのである。酒に關する語彙を多彩にもつ李白にとつて、「酔い」のたのしみ以外に何も必要とするものはなかつたであろう。第二首の末句にも、「春風に笑い、羅衣を舞う、君今醉わず、將に安くにか歸らんとする」とうたう。この詩題は、晉の傅玄や、陳の張正見にもみえるが、^{註28}いづれも儀禮的に賓主萬歳の壽を祝う置酒の宴をのべたものである。「李白詩論叢」は、胡震亨の説に同調し、鮑照の「堂上歌行」に學ぶという。しかしながら、鮑照の詩は、

四坐 且らく誼しくする莫れ、我が堂上の歌を聴け。

昔京洛に仕えし時、高門は長河に臨む。……

(鮑參軍詩注 卷一 堂上歌行)

の如く、懷舊のうたである。なるほど宴のはなやかな光景はうつくしい。だがこれは、鮑參軍詩註集説の中に朱乾の「言外に今の然らざること見わるなり」という説がみえるように、昔日の夢を追懷する姿でしかない。一方李白は、今をうたう。過去も未來も今は問題でないというのである。「且つ樂しむ生前一杯の酒、何ぞ須いん身後千載の名」である。もう一つ、李白集では歌吟に分類されているが、樂府詩集では樂府として採られている「襄陽歌」をあげておこう。

落日欲沒岷山西 落日沒まんと欲す 岷山の西

倒着接羅花下迷 倒に 接羅を着けて花下に迷う

襄陽小兒齊拍手 襄陽の小兒 齊しく手を拍ち

攔街爭唱白銅鞮 街を攔つて争い唱う 白銅鞮

傍人借問笑何事 傍人借問す 何事をか笑うと

笑殺山公醉似泥 笑殺す 山公酔うて泥の似きを

鷓鴣杓 鷓鴣の杓

鷓鴣杯 鷓鴣の杯

百年三萬六千日 百年 三萬六千日

李白の樂府について(島田)

一日須傾三百杯 一日 須らく傾くべし三百杯

遙看漢水鴨頭綠 遙かに看る 漢水鴨頭の綠

恰似葡萄初醞酷 恰かも似たり 葡萄の初めて醞酷す

るに

此江若變作春酒 此の江 若し變じて春酒と作らば

壘麴便築糟邱臺 壘麴 便ち築かん 糟邱の臺

千金駿馬換小妾 千金の駿馬は 小妾に換え

笑坐雕鞍歌落梅 笑つて雕鞍に坐して 落梅を歌わん

車旁側挂一壺酒 車旁 側に挂く 一壺の酒

鳳笙龍管行相催 鳳笙龍管 行くゆく相催おす

咸陽市中歎黃犬 咸陽の市中 黃犬を歎ずるも

何如月下傾金罍 何ぞ如かん 月下に金罍を傾くるに

君不見晉朝羊公 君見ずや 晉朝の羊公も一片の石

一片石

龜頭剝落生莓苔 龜頭剝落して 莓苔を生ず

淚亦不能爲之墮 淚も亦 これが爲に墮つる能わす

心亦不能爲之哀 心も亦 これが爲に哀しむ能わす

清風朗月不用一 清風朗月 一錢を用いずして買う

錢買

玉山自倒非人推 玉山自ずから倒る 人の推すに非ず

舒州杓 舒州の杓

力士鎧 力士の鎧

李白與爾同死生 李白 爾と死生を同じうせん

襄王雲雨今安在 襄王の雲雨も 今安いざくにか在る

江水東流猿夜聲 江水は東流し 猿は夜聲なく

(襄陽歌 卷七)

これは襄陽にいた時の作であろう。同じ時の作として雑歌謡辭に屬する「襄陽曲四首」をも殘しており、晉註の山簡の故事を愛した李白の面目が躍如としてうかびあがつてくる。共に、「襄陽董兒歌」から題材と發想を得たものと思われるが、そのもとの歌には

山公 何許いずこより出ず、往いて至る高陽池。日夕 倒

載して歸り 酩酊 知る所無し。時時には能く馬に騎

るも、倒まかしに著く白接羅。鞭を擧げて葛疆に向う、并州

の兒に何如んぞやと。(樂府詩集、卷八十五)

とあるように、醉つばらいの名も高い山簡、それほどに

酔いたのしむことのよき、天衣無縫の酔い心地は、かぎりない夢をもわきたたせる。李白は山簡に似るのを本望とした。「鸚鵡の杓」、「鸚鵡の杯」、そんなものは現實にはなからうに、さらに、一日三百杯を傾けると話はずみ、遂には、川を酒とみたてて旨酒のよい匂いまでも想像させる飄逸さ。清風朗月をとらえて「ただだよ、ほんとにこれほどいい酒の肴はないじゃないか」と教える視點の奇警さ、おそらく李白の面目は、これらの境につきるであろう。たとえば、飲酒の楽しみについて、陸機がうたう「飲酒樂」が、

酒を飲まば須らく多く飲むべし 人生能く幾何ぞ。

百年須らく樂しみを受くべし、厭う莫れ管弦の歌。：

…(樂府詩集、卷七十四)

と、無理に氣をひきたて、管弦のたのしみを厭つてはならぬと、受身をおしかえす形で歡樂へ赴むこうとするのに對して、李白の趣きは、すつかり、たのしみそのものの謳歌になり切つているのが、この章でのべてきた事柄をよく説明すると思われる。

樂府が、本來民衆のうたとして發達したことは、余冠英^{註30}その他によつても明らかであるが、以上、無常感について、あるいは閨怨のうた、遊仙、快樂についてのべて來た李白の詩の諸特徴は、そうした樂府の性格をよく受けついでたといえるであろう。それまでの中國の詩に、李白のもたらし加えたものは何であつたか、それはどんな結果をうみ出していつたか、私がこころみた分析によつて可能な結論を出すすれば、ほぼ以下のことが答えられると思う。

1、敘事性の發展。「おはなし」の要素は從來の實在尊重の風をやぶりうる萌^{きざ}しであり、ゆたかになつた盛唐庶民の生活感情をよく反映する。

2、シーン造型の自在さと豊富さ。六朝期文學のもつ類型は、李白に至つて新しい型を與えられる。それは李白の才能によつてこそ可能なものであつたかもしれないが、彼のイリミュージョンは陳腐な着想と表現をいきかえらせたといつてよい。

李白の樂府について(島田)

3、空想力の擴大。無限の力の世界へのあこがれは、李白に至つて、もつとも庶民の感情と一致する。彼の空想力はそうした巾のひろい層の共感をかちうるほどのものであり、それがその詩を多くの人びとのものとした。

4、快樂の謳歌。これこそ李白の最大の功績である。彼の態度は、「人類の長い歴史——未來に對する誠實」という顧慮から、快樂を捨ててしまふなどというのからは遙かに遠く、現在の一瞬を充實させることにこそ、もつとも意欲的である。快樂はこころよきたのしみである、大手をふつてうたいつづけた彼は、人生における快樂の意味を、人びとに教えたのである。

比較の對象にしてきた詩人たちが、おおむね感情の沈潜、靜止の方向をうたうのに對して、李白は、あふれ出る詩想を、動の方向でうたう。これはおそらく、漢魏齊梁のあらゆる歴史遺産の上につちかわれた盛唐の氣象の反映といふことができるであらう。^{註31}更に、

荊公、四家の詩を次第するに、李白を以て最下とす。

俗人多く之れを疑う。公曰く、白の詩、俗に近く、人の悦び易きが故なり（苕溪漁隱叢話引卷六）

という記載は、私の注意をひく。人びとが悦び易い詩、それこそが李白の詩だからである。彼の樂府詩は多彩であつて、あたかも、今日我々が接する數多くの「歌謠曲」集にも似ている。歌謠曲のいいものは、林庚の言をかりれば「所謂、雅俗共賞」でありえよう。そうした性格を、これら李白樂府の特質がはらんでいることを見逃してはなるまい。さればこそ「語淺く意深い」樂府の性格をとらえて、その天分にみがきをかけたのである。

李白は中國文學史上、第一の雅俗共賞の大詩人である。^{註32}

のも、ゆえなきことではなく、樂府の本色はここにきわまるといつてよいであろう。

更に、李白の詩は傳統の上に育つたものであるが、明の王世貞が

李杜の才、六朝の諸君子より高し、然うして六朝樂府の變は李杜より始まる（弇州山人四部稿、卷百二十一）

というように、前人の作をまねて作つたのでなく、やはり創造の力は大きかつた。樂府の新しい方向は、それまでの基礎の上に、李白と杜甫の二人によつて作り出され、發展させられたといえる。しかも同じ方向ではなくて、二つのちがつた方向、詩のもつ二つの極點の可能性を、それぞれに完成させたものである。私がこれまでのべてきたのは、李白が到達した極點の性格についてであり、中國の詩の常にもつ一面の、内容分析でもあつた。

庶民もともによろこんで愛誦し、今もなお愛されてふしぎでないという點にこそ、李白の詩を位置づける基準がひそんでゐる。そうした性格をもたらししたのは、李白詩のもつともすぐれた部分に共通してみられるイリュージョンのゆたかさであり、積極的な快樂の謳歌における心やすさである。彼の健康なイリュージョンの世界は、今日においても、我々のイリュージョンの世界の中で、すこやかに呼吸する。杜甫は酒の肴にならぬが、李白は大いに酒の肴となる、そうした愉快なたのしみの價值をとりだして、大膽にうたうこと、人生の中では、緊張ばかりが必要なのでな

い、弛緩もまた大切な意味をもつということを人びとに教えたということ、李白の文學のひろがり、實にこれらの面でこそ活潑である。彼によつて擴大されたそのような方向が、やがてはより多く弛緩と快樂をうたう器となつた「詩餘」を用意するのではないかと思うが、これは更に考證を要する問題であらう。^{註33}

杜甫との比較は、この小論の目的ではないが、最後につけ加えるならば、杜甫が「有から有以上のもの」をうみ出した詩人であるなら、李白は「無から有」をうんだもう一人の詩人であつた。^{註34}それは、人生に對する二人の詩人の態度を根本的に差異のあるものとして提起してもいる。李白は、この世を一つの「無」そのものとしていたのかもれないからである。人生短促などについての悲哀感が、あまりにも稀薄であることが、他の詩人との比較の結果として得るとすれば、そのことは説明がつくのではないか。生活を離れながら、「觀念」の健康な娛樂にいそしむ李白は「寄」の世にあそぶことで杜甫と對照的なのである。杜甫が、人生の出來事に粘りづよく對處した詩人であり、誠實

李白の樂府について（島田）

一路をつらぬき、人と人との關係において、その誠實こそが明日をつむぐものだという思想を、可能なかぎり擴大したといえるなら、李白が擴大したのは、天衣無縫の幻想的世界である。「有」と「無」具象性の有無という二つの極點に到達して、この二人の詩人はそれぞれの才能を際立たせているのである。

李杜二公、正に優劣するには當らず、太白に一・二の妙處あり、子美いう能わず、子美に一・二の妙處あり、太白作る能わず、子美は太白の飄逸を能くせず、太白は子美の沈鬱を能くせず。

（雪浪齋詩話、苕溪漁隱叢話引）

という評は、二人をよく對比した言葉であらう。李白と杜甫は、二つの分野で、詩を最大にはなひらかしめた詩人であつたといえる。そして李白の家數を、雄豪空曠とする評（歷代詩話、木天禁語）にも肯定を示してよいであらうと思う。彼の樂府は、この言葉が示すように、雄豪であり空曠である。こまごましい人間の世界における「今日、只今のたのしみ」をもつて、過去と明日を忘れさせるリクリエ

一 ションのうた。彼がうたつた詩のすべてはしかし、我々に明日をいとわせはしない。李白はやはりすぐれた詩人である。

附 註

第一章

註1 繆本・北宋蜀刊本の、繆氏による重刊本。

許本・蕭氏分類補註本の許自昌による刊本。いずれも李白

歌詩索引による。

註2 李白歌詩索引による。

註3 王瑤「中國詩歌發展講話」中國青年出版社。

註4 詹鍔「李白詩論叢」作家出版社。

註5 樂府詩集卷九十九「新樂府者、皆唐世之新歌也、以其辭實樂

府、而未常被於聲、故曰新樂府」

註6 樂府詩集卷七十九「近代曲者、亦雜曲也、以其出於隋唐之

世、故曰近代曲也」

註7 ① 養一齋李杜詩話「朱子謂鮑明遠才健、太白專學之」

② 鮑參軍集題辭「樂府五言、李杜之高曾也」

③ 杜甫、春日憶李白詩、「白也詩無敵、飄然思不羣、清

新庚開府、俊逸鮑參軍」

④ 鮑照の樂府四十二題の中、李白は十八題を共にしており、その他の詩篇の語彙にも多くを得ている。前出の詹

鍔の表は、鮑照をもつとも多く源流ととく。

註8 この論文の第二章での分け方は、大體この五つの分け方に

よつたが、順序は不同であり、且つ、君王への賛美の項は特にとりあげない。

註9 青木正兒「支那文學概説」。九十四ページ。増田清秀「清

商曲の源流と吳歌西曲の傳唱」大阪學藝大學紀要第三號。

第二章

註10 養一齋李杜詩話。

註11 江淹「古離別」玉臺新詠卷五。

註12 趙鳳北詩話卷一。

註13 樂府詩集卷十七。

註14 樂府詩集卷十六。

註15 樂府詩集卷六十三。

註16 鮑參軍詩註卷一。

註17 武部利男「李白小傳」新潮社。

註18 第二章の四後述参照。

註19 王瑤「李白」上海人民出版社、吉田惠氏の翻譯がある。三

一書房。

註20 羅根澤編著「中國古典文學論集・李白愛祖國愛人民的一面」

註21 鮑照「觀漏賦」参照。

註22 林庚「中國文學簡史」によれば、李白は、青春の生命をう

たうことを熱愛したのであつて、烏棲曲の中には、青春の生

命の目ざめがあるといつている。

註23 中國文學報第四冊、福永光司「王瑤「李白」林庚「詩人李

白「武部利男「李白小傳」書評参照。

註24 李白歌詩索引による。

註25 晉書張翰傳、世說新語任誕篇上参照。

註26 前出、詹鍇「李白詩論叢」

註27 伊藤正文「鮑照傳論稿」参照。

註28 樂府詩集卷六十五。

註29 晉書卷四十三、世說新語任誕篇上、参照。

第三章

註30 余冠英「樂府詩選・序」人民文學出版社。

註31 舒蕪「李白詩選・前言」人民文學出版社。

註32 林庚「中國文學簡史」上海文藝聯合出版社。

註33 陸侃如、馮沅君「中國詩史・上」作家出版社。

註34 武部利男「李白・上 吉川幸次郎、跋文」中國詩人選集。